8/2004

Special Intervie

アメリカ人も楽しめる日本の歴史小説

「Zero Over Berlin」著者 佐々木譲氏

ミシマ、オオエ、ムラカミだけではない、「世界に通用する小説は日本にたくさんある!」と、日本の人気小説の英訳を次々と送り出している出版社バーティカル。7月には、佐々木譲氏の航空冒険小説「Zero Over Berlin」を発表。出版に合わせて来米した佐々木譲氏と、バーティカル社長の酒井弘樹氏に話を聞いた。

映画界を中心に日本ブームが進行する中、バーティカルは文芸界にも日本ブームを巻き起こしそうな存在。しかし、一般的な日本ブームと一線を画すのは、日本的な要素を持つ作品をウリにしているわけではないということ。サムライも、日本刀も、クローンのようなサラリーマンたちも出てこない。ただ作家が日本人というだけで、一つの小説としてアメリカの読者にも受け入れられる作品を選び、発表している。

7月に発表された「ベルリン飛行指令」(英題「Zero Over Berlin」)は、太平洋戦争中、日独伊三国同盟が結ばれた直後に、ゼロ戦をベルリンまで飛ばすという、無法な計画を実行する男たちの物語。日本的な色の濃い小説とも思えるが、酒井社長は、これまでと同様「広く読んでもらえる、上質なエンターテインメント」の基準でチョイスした、と話す。

「読者(アメリカ人)の知らない"新しい要素"があることを含めて、普遍的な作品だと思います。当時の軍国主義的な思想についても、(肯定・否定ではなく)地球上にあった一つの考え方であると読者が理解できるように書いてある。日本の歴史を知らなくても、物語の中にぐいぐい引き込まれて、読み終わったら自然と(日本史が)頭に入っている、そんな作品です」

翻訳化を意識して書いた

「ベルリン飛行指令」は1988年に「新潮ミステリー倶楽部」シリーズの1冊として発表された。著者の佐々木氏は当時、いずれ翻訳されることを意識して書いていたそうだ。

「『新潮ミステリー倶楽部』は『日本のミステリーにも国際的な競争力を与えよう』というコンセプトで作られていたんです。編集者にはいつも『読者は、狭い日本の国の中だけではない。翻訳しても十分なクオリティーを持った作品を書いてください』と言われていました」

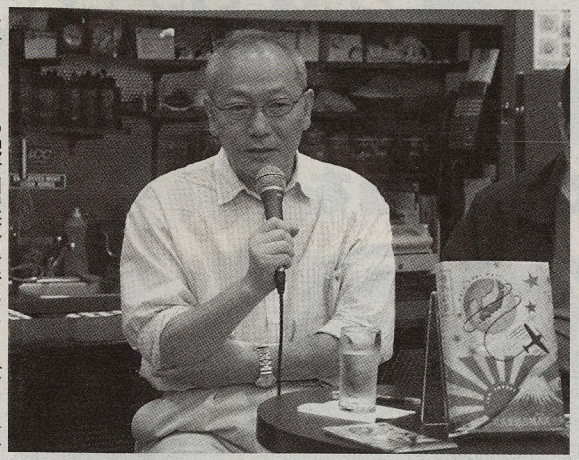
日本のエンターテインメント小説は欧米の作品に劣る、という当時の風潮の中、「もっと質の高い作品を作りたい」という編集者の志に応えた作家の1人が、佐々木氏だった。「ベルリン飛行指令」ほか3作でスタートした「新潮ミステリー倶楽部」は、日本のエンターテインメント小説の質を底上げしたと、今でも語り継がれている。

「執筆には時間がかかりましたが、それだけのものを書くことができたし、それがようやく翻訳化されたんだなあと思うと、とてもうれしいですね」と佐々木氏。本書は、87年のニューヨーク滞在中に書き始めたこともあり、思い入れの深い作品のようだ。

「構想はありましたが、ドイツやイラクやいろんな国の人が出てくるし、それを書くだけの力がないと思っていました。それまで異文化体験もなかったですし、外国人と接したこともほとんどなかった。ニューヨークに来て、いろんな国の人と日常的に触れ合うことで、(キャラクターを)書き分ける自信が付きましたね」

発表から16年を経て、アメリカ人読者の評価にさらされることになった「ベルリン飛行指令」。酒井氏は「アメリカの作品のものまねではなく、オリジナリティーがある作品」と自信を持って送り出す。著者本人は、「普通に読んで楽しんでもらって、その評価を聞きたいですね」とにこやかに語った。

(文/遠山清香)



ニューヨークの紀伊國屋書店で行われたイベントで、ファンの質問に答える佐々木氏

ささき じょう

1979年「鉄騎兵、跳んだ」でデビュー。歴史を背景にした小説を数多く発表し、根強いファンを持つ。89年「エトロフ発緊急電」で、日本推理作家協会賞などを受賞。現在は北海道東部で馬2頭とともに暮らしながら、執筆活動を続けている。

Zero over Berlin
Joh Sasaki
Vertical
$22.95

日独伊三国同盟締結直後の昭和15年。ドイツ軍から、日本の最新鋭戦闘機「ゼロ戦」を納入せよ、との要請を受け、日本軍は2人の札付きパイロットに極秘指令を下す。「ゼロ戦を駆ってベルリンへ飛べ」。いかにしてゼロはベルリンにたどり着くのか?読み出したら止まらない、疾走冒険小説。

※ 購入は最寄りの書店もしくは www.vertical-inc.com まで

あなたの足は満たされてますか?

脅威の力で水虫菌撃滅!